様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２　年５　月　６　日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２００９０
研究課題名（和文）アレッサンドロ・フランキの宗教画の図像解釈学的研究

研究課題名（英文）Iconological Study on Religious Paintings of Alessandro Franchi

研究代表者
甲斐　教行（KAI NORIYUKI）
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０３２３１９３

研究成果の概要（和文）：中部イタリアのシエナを中心に活躍した画家アレッサンドロ・フランキ（１８３８－１９１４年）と委嘱主の諸修道会との関連を検討し、画家の一連の宗教画に貧者への扶助等の慈善活動を促す意味内容を読み取った。またジェノヴァのサンティッシマ・アヌンツィアータ教区聖堂の壁画《無原罪受胎の教義》、シエナのサンタ・テレーサ女子寄宿学校礼拝堂装飾、そしてオルヴィエート、ボローニャ、プラートの各聖堂に所蔵される三点の《聖家族》の銘文と図像の典拠を特定し、各作品の意味内容を読解した。

研究成果の概要（英文）：I studied the close relationship between a Tuscan painter Alessandro Franchi (1838-1914) and monastic orders who commissioned pictures to him, specifying many charity meanings in his religious paintings. I also studied iconography and literature sources of inscriptions on the following paintings and decorations: «Dogma of the Immaculate Conception», which is a fresco painting in the SS. Annunziata Parish Church in Genoa, the decorations of Santa Teresa Institute in Siena, and three paintings of «Holy Families» in the churches in Orvieto, Bologna and Prato.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	８００，０００	２４０，０００	１，０４０，０００
２００８年度	７００，０００	２１０，０００	９１０，０００
２００９年度	１，５００，０００	４５０，０００	１，９５０，０００
年度			
年度			
総　計	３，０００，０００	９００，０００	３，９００，０００

研究分野：西洋美術史
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：美術史、図像解釈、イタリア、シエナ、フランキ

１．研究開始当初の背景
近現代イタリアの宗教画研究、特にフランキのようなアカデミックな様式の絵画研究は著しく立ち後れており、わが国ではこの

時期の同種のイタリア絵画を対象とした研究自体がほとんど存在しなかった。

本国イタリアにおける本格的なフランキ研究は、画家の死の翌年に出版され、一次資料として解釈すべき二つのモノグラフ（*Alessandro Franchi e le sue opere*, a cura di L. Franchi Mussini, Siena 1915; *Il pittore Alessandro Franchi. Notizie biografiche*, N. Mengozzi, "Bullettino Senese di Storia Patria", XXII, pp.3-108, 1915）を別にすれば、1972 年のデル・ブラーヴォ（*Per Alessandro Franchi*, Carlo Del Bravo, "Annali della Scuola Normale Superiore di Pisa", II, 2, pp.737-759, 1972）までごく散発的にしか存在しなかった。デル・ブラーヴォは画家の様式を、師ルイジ・ムッシーニの影響の強い第一期（1860 年代から 70 年代初頭）、フランドラン等のフランスの宗教画家の影響を受けた、知的・純形態的関心の強い第二期（1870 年代中葉）、そしてラファエル前派やジョン・ラスキンの影響を受けた、感情に訴えかける要素がいっそう顕著となっていく第三期（1880 年代以降）に分類し、同時代のフランス及びイタリアのサロン評や芸術時評を丹念にたどりつつ画家をとりまく思想的文化圏の再構築に貢献した。しかしデル・ブラーヴォ以降、その弟子筋を中心に展開されていった同時期のシエナ絵画のレパートリーの発掘、図版出版、文化的考察（*Siena tra Purismo e Liberty*, Milano-Roma 1988; *La cultura artistica a Siena nell'Ottocento*, a cura di Carlo Sisi, Ettore Spalletti, Siena 1994; R. Agresti, *Alessandro Franchi*, in *L'Ottocento a Prato*, a cura di R. Fantappié, pp.95-107, Prato 2000）は、デル・ブラーヴォの築いた大枠を基本的に継承するものの、新たな視点の提起には至らなかった。

上記先行研究は、フランキの個々の作品の存在意義とそのメッセージの分析にまで踏み込んでいない。とくに、フランキが直接関わりをもったパトロンや修道会の思想との具体的な関連を掘り下げた研究は皆無であった。方法論的にも、フランキ作品に関する図像史的・図像解釈学的考察は未踏の分野であった。

２．研究の目的

本研究では、16 世紀イタリア画家の宗教画研究に研究者自身が試みてきた、画家の図像と画家をとりまく委嘱主の精神的文化圏との照応関係に基づく図像解釈の手法を、近代ヨーロッパの宗教図像に応用することによって、フランキの諸作品を単に個別に解釈するにとどまらず、各図像が内包する思想上のメッセージを、画家及び委嘱主の共通理念という精神的文脈の中に位置づけることをめざす。

具体的には、「シエナの聖女カテリーナの貧者の姉妹」（Sorelle dei Poveri di Santa Caterina da Siena）、「愛徳姉妹会」（Figlie della Carità）、そしてシエナ、プラート、フィレンツェ等各地のミゼリコルディア同信会のような、困窮者への扶助活動を旨とする教団および準宗教的組織がその中核をなす。そこに、フランキの保護者であった文献学者チェーザレ・グアスティ、フランキの最初の作品《キリスト生誕》（逸失）等の依頼主であり上記「貧者の姉妹」会を認可したシエナ大司教エンリコ・ビンディ、シエナのサンタ・カテリーナ礼拝堂装飾の出資者ガスパーレ・オルミらパトロンたちが加わる。上記組織の精神性の調査と上記パトロンたち自身の著作物を検討することによって、説得力ある首尾一貫した図像解釈と、近代イタリアの宗教図像の理解に新たな視点から貢献することをめざした。

研究対象としては、シエナ近郊ブローリオのカステッロ・リカーゾリのサン・ヤコポ礼拝堂装飾、シエナのサンタ・テレーサ女子寄宿学校礼拝堂装飾、シエナのミゼリコルディア墓地の各礼拝堂装飾、リグーリア州ラヴァーニャのカルミネ聖堂天井装飾、ジェノヴァのキアッペート神学校装飾（現サンティッシマ・アヌンツィアータ教区聖堂）等の、大規模な装飾群が考察の中心となる。これらの装飾群がもつ特定のメッセージを図像解釈および銘文読解（出典の特定と解釈）の手法により抽出し、それを上記修道会・パトロンの思想との関連において実証するとともに、これら作品群に一貫して流れるフランキの思想・倫理観の特定をめざした。

本研究は、このように従来もっとも手薄であった画家の最晩年の作品群に対象を設定し、従来の研究によって試みられなかった、銘文読解や聖書解釈をも含んだ図像解釈学的考察をおこなうことによって、フランキ研究に新たな視点を提起することを目的とする。

３．研究の方法

ゴールデン・ウイーク期（４月末～５月初旬）、夏期（７月末～９月前半）及び春期（３月下旬）等のイタリアでの資料収集・実地踏査・作品の写真撮影と、国内における資料解読・解釈を主たる研究方法とする。

作品の実地踏査はシエナ、ジェノヴァ、フィレンツェ、プラートの若干の聖堂およびローマ、ポマランチェにあるフランキ作品を対象に、作品の有無の確認、実地観察と撮影をおこなう。

資料収集・分析としては、以下の課題と取り組んでいく。

まず、画家の初期の精神的指導者であった文献学者チェーザレ・グァスティの著作の検討により、フランキの芸術修業期における芸術論、教育論、道徳論について検討する。特に、グアスティの著作に見られる、真善美の一致と芸術における道徳的要請といった側面の理解を掘り下げる。

またグアスティの親友でフランキの初期作品の依頼主であり、のちにはシエナ大司教として画家と関わりを保ったエンリコ・ビンディ、シエナのサンタ・カテリーナ礼拝堂装飾の出資者ガスパーレ・オルミらの数多い宗教的・道徳的著作の検討も課題であり、いくつかのフランキ作品のメッセージ、とくに活動的生と隣人愛の称揚、絵画の教育的価値の重視、といった側面を補強する同時代史料を見出していく。これら史料の閲覧には、フィレンツェの国立中央図書館、シエナの公立図書館等を利用する。

フランキが強い関わりをもったシエナの「聖女カテリーナの貧者の姉妹」の創設理念を知るには、創設者である福女サヴィーナ・ペトリッリの複数の伝記に加え、同修道会会則を註釈した指導書（*Direttorio*）の参照が必須である。同書は修道会の非公開内部資料だが、応募者は２００５年９月に修道会の許可を得て、その一部の複写を入手した。

具体的な作品解釈においては、フランキの作品中の銘文の出典をインターネット調査等により特定する。そして出典の前後の文脈と聖書註釈等を踏まえ、また図像そのものとの関連を検討したうえで、個々の作品に固有のメッセージを特定していく。

神学典拠・美術史研究書のうち、購入可能なものは、茨城大学教育学部西洋美術史研究室に配置する。また購入不可能なものについては、上智大学付属図書館内中世思想研究所、イタリア文化会館図書室等を中心に、閲覧・収集を継続しておこなう。

「無原罪聖母」およびそのヴァリエイションである「奇跡のメダルの聖母」と「ルルドの聖母」、「カルメルの聖母」、さらには「ロザリオの聖母」のヴァリエイションである「ポンペイの聖母」のように、大衆的に広く普及した図像をフランキが採り上げた場合については、そのような図像情報の普及の典型的な例としていわゆる Santini（聖堂などに置かれる小型の宗教画像）の蒐集・調査によって、図像伝統の広がりと機能に考察を拡げていく。

４．研究成果

（１）1901-04 年にフランキが装飾したジェノヴァのキアッペート神学校（現サンティッシマ・アヌンツィアータ教区聖堂）礼拝堂壁画のうち、《無原罪受胎の教義》を中心に考察し、この主題の背景、歴史、フランキによる同一主題の作例を検討したうえで、本作の登場人物が携える銘文の典拠を特定し、登場人物を特定した。無原罪受胎の教義はフランチェスコ会を中心に普及し、ルネサンス期から造形表現の対象となってきた。しかし 1830 年、パリの「愛徳姉妹会」（Filles de la charité）の総本山で、修道女カトリーヌ・ラブレ（1806-76 年、1947 年列聖）が二度にわたって無原罪聖母の訪れを体験したとされる出来事から特に普及が進み、1854 年 12 月 8 日に教皇ピウス九世（在位 1846-78 年、2000 年列福）によって本教義は最終的かつ公的に認可された。1854 年にはフランスのルルド出身の少女ベルナデット・スビルー（1844-79 年、1933 年列聖）がマッサビエーユの洞窟で無原罪聖母の訪れを計 18 回体験したとされる。フランキ自身、カトリーヌ・ラブレの幻視を扱った三点の祭壇画と、「ルルドの聖母」を描いた絵画作品をも描いている。教義公認 50 周年に当たる 1904 年には、教皇ピウス 10 世が回勅「いとも喜ばしき日に」（Ad diem illum laetissimum）によって教義の意義を改めて強調した。フランキの装飾はおそらく記念祭に合わせて制作されたと考えられる。

同壁画の画面上方には無原罪の聖母と、両側からとりまく二群の天使たちが表されている。以下、登場人物と銘文を特定して記す。画面下方の左側には、モーセ（「創世記」3, 15）；エリヤ（「第三列王記」18, 44）；ダヴィデ（「詩篇」84, 1）；ソロモン（「雅歌」4, 7）；イザヤ（「イザヤ書」19, 1）；使徒アンデレ（ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』、「聖使徒アンデレの章」の一節のパラフレーズ）が描かれている。

画面下方の右側には、聖アンブロシウス（*Expositio in Psalmum CXVIII*, in *Patrologia Latina*, 15 [Parisiis 1845], col.1521B）；聖ヒエロニムス（*Breviarium in Psalmum LXXVII*, in *PL*, 26 [Parisiis 1845], col.1049C）；聖ペトルス・ダミアーニ（*Sermo XL in Assumptione Beatissimae Mariae Virginis*, in *PL*, 144 [Parisiis 1853], col.721C）；聖アンセルムス（*De conceptu virginali et de originali peccato*, in *PL*, 158 [Parisiis 1853], col.451A）；アッシジの聖フランチェスコ（*Salutatio Beatae Mariae Virginis*, in *Fontes franciscani*, Assisi 1995, p.219）；ドゥンス・スコトゥス（スコトゥスの弟子の著作 Franciscus de Mayronis, *In quattuor libros Sententiarum*, Venetijs 1520, lib.3, dist.3, quest.2, p.165r.等に由

来する警句）；スウェーデンの聖女ビルイッタ（*Revelationes caelestium*, Lib.3, cap.8, in *Revelationes S.tae Brigittae* etc., Romae 1628, t.1, p.241）、そして銘帯をもたないピウス九世が描かれている。

これら14名の人物の選択にあたっては、ルイジ・ランブルスキーニ枢機卿（1776-1854年）がローマ教皇庁秘書官時代の1842年に著し、ただちに各国語に翻訳された『マリアの無原罪受胎について』（*Sull'Immacolato Concepimento di Maria*）も影響を与えたと考えらえる。ピウス九世を本教義公認へと導くうえで大きな役割を果たしたランブルスキーニ枢機卿は、ジェノヴァ大司教時代の1820年に、キアッペートの聖堂を最初に神学生のための施設に転用した人物である。神学校の歴史に関わりの深いこの枢機卿の論考には、フランキの画中に用いられたモーセ、イザヤ、ソロモン、アンデレ、アンブロジウス、アンセルムス、ヒエロニムス、ペトルス・ダミアーニの一節への言及が見られる。

フランキの青年時代の指導者であるチェーザレ・グアスティの著作、特に *La virtù ispiratrice del Bello* (1851), C. Guasti, in *Scritti d'arte di Cesare Guasti*, pp.37-52, Prato 1897 および、*Del purismo nell'arte* (1852), C. Guasti, in *Scritti d'arte di Cesare Guasti*, pp.53-61, Prato 1897 に見られる、真善美の一致の理想と、芸術に道徳的内容を求める思想は、初等科神学生のためのキアッペート神学校に、公認50周年を迎える重要なカトリック教義と聖人たちの註釈を盛り込んだ教育的・図解的内容をもつ壁画の制作にも活かされている（以上、雑誌論文①）。

（2）シエナのサン・クィリコ通りにあるサンタ・テレーサ女子寄宿学校の礼拝堂装飾は、守護聖女であるアビラの聖女テレーサ（1515-82年）の没後300年祭に合わせてレオポルド・ブファリーニ神父が委嘱し、フランキやその忠実な協力者ガエタノ・マリネッリを始めとするシエナ美術学校（Istituto d'arte di Siena）の教官とその弟子たちが参加、1880年から1900年までの時期に23点の祭壇画・天井画が制作された。このうち、アビラの聖女テレーサ（1515-82年）を扱った物語が11場面含まれる。本研究ではこれらの場面の典拠の調査をおこない、以下の結論を得た。

テレサが生前に著した『自伝』にすでに登場するのは、フランキ作《テレサの法悦》（主祭壇画）、《修道院に入るテレーサ》（主祭壇画プレデッラ）、《執筆するテレーサ》（同プレデッラ）、《修道院の建設を命じるテレーサ》（同プレデッラ）、《聖ペドロ・デ・アルカンタラのテレーサへの出現》の諸場面である。フランシスコ・デ・リベラとディエゴ・デ・イエペスによるテレーサ伝（それぞれ1590年及び1599年刊）の両方に登場するのは、マリネッリ作《甥を蘇生させるテレーサ》と《テレーサの死》である。リベラによる伝記にのみ登場するのは、マリネッリが描いた《イエスのカタリーナへのテレーサの出現》である。

フランキ作《十字架の聖ヨハネに修道衣を授けるテレーサ》は、上記の二つの伝記には短い暗示的言及しか見出せず、マリネッリ作《テレーサの列聖》とフランキ作《少年イエスのテレーサへの出現》に至ってはまったく言及がない。今回の調査では、礼拝堂の委嘱主ブファリーニ自身の求めで執筆されたテレーサの伝記小説、ベルナルディーノ・ケックッチ著『イエスのテレーサ（*S. Teresa di Gesù*）』（1882年刊）が典拠として浮上した。同書には上記三場面の詳細な記述が含まれるため、フランキとマリネッリが参照した可能性が高いと結論づけた（以上、雑誌論文②）。

（3）フランキはほぼ同一構図の《聖家族》を三点描いている。オルヴィエートのサンタンドレア聖堂聖具室所蔵の祭壇画（1895年）、ボローニャのベンティヴォリオ城ピッツァルディ候礼拝堂祭壇画（現在ボローニャ、サクロ・クオーレ聖堂、左手の第一礼拝堂所蔵、1898年）、プラート大聖堂所蔵の小型祭壇画（1898年）である。三点は形状と寸法に若干の相違があるほか、下方に付された銘文がそれぞれ異なっている。本研究では、最初のボローニャ祭壇画と同年に出版されたガスパーロ・オルミ著『キリスト教徒の家族の模範たるナザレの家族（*La famiglia di Nazaret modello delle famiglie cristiane*）』を典拠として挙げ、同書の内容をふまえつつ各祭壇画の図像と銘文を考察した。

著者のオルミは一般信徒向けの啓蒙書を数多く刊行したシエナ出身の聖職者で、ボローニャ祭壇画の直前、1894-95年にフランキが手がけたシエナのサンタ・カテリーナ礼拝堂装飾の委嘱主でもある。オルミは同書の中で、19世紀末の無神論思想の伝播による現世の「堕落」を前に、家族を伝統的秩序の下に回帰させることで社会の改造を始めるべきであるとカトリック教会の立場から警鐘を発している。オルヴィエート祭壇画の「あなたは見て、模範に従って造りなさい（INSPICE ET FAC SECUNDUM EXEMPLAR）」（「出エジプト記」25, 40）という銘文は、聖家族gaがこうした意味からも「模範」、すなわち信徒のまねびの対象であることを強調している。またボローニャ祭壇画の「私は彼らのために祈ります。〔現世のためにではなく〕あな

たが私にくださった者たちのためにです（EGO PRO EIS ROGO [non pro mundo rogo sed] QVOS DEDISTI MIHI）」（「ヨハネ伝」17, 9）は、現世ではなく神に救いを求める信徒こそが聖家族を手本と仰ぐ人々であると規定する。最後にプラート祭壇画の「主人が自分の家族を委ねる者は誰ですか（QVEM CONSTITVIT D[OMI]N[V]S SVPER FAMILIAM SVAM）」（「マタイ伝」24, 45 のパラフレーズで、『ローマ聖務日課書』の聖ヨセフへの晩課に所収）という銘文は、「家長」ヨセフの意義を強調し、ヨセフは本作でのみ自らを指し示す身振りで表されている（以上、雑誌論文⑤）。

（４）シエナ近郊カステッロ・ディ・モンタルトの聖堂に所蔵され、近年シエナのモンテ・デイ・パスキ財団が購入した《聖母子と幼児聖ヨハネ》は、従来フランキ周辺の画家に帰属されてきたが、本研究でフランキの師ルイジ・ムッシーニの下絵（シエナ、モンテ・デイ・パスキ銀行）との構図及び寸法の一致を確認し、ムッシーニ作であることを初めて公表した。本作はシエナのマリア・バッラーティ・ネルリ女侯爵により委嘱された三作品のひとつで、他の二点は、ムッシーニが 1856 年に制作した《悲しみの聖母》（シエナ、市立美術館）と、彫刻家ジョヴァンニ・デュプレが 1854 年に制作した《感謝》（シエナ、個人蔵）である。

聖母の膝に坐す幼児キリストは、受難の運命を指し示し葦の十字架を携えたヨハネに対し厳しい表情を浮かべ、左腕で拒絶の身振りをする。母の愛と調和に満ちた穏やかな田園に満ちる落日の光の中に、いましばらくとどまっていたいかのように。受難の運命はやがて現実のものとなり、《悲しみの聖母》はゴルゴタの丘の上で人類のため犠牲となった息子を見上げている。一方原罪から贖われた人類を擬人化した少女像《感謝》は、人類を縛っていた鎖から解き放たれ、プリニウスが伝えるように「老いたり虫に食われることのない」ビャクシンの花冠を頭上に巻き、その感謝の念が不朽であることを示している（以上、雑誌論文③）。

（５）1893 年、フランキ夫妻は「シエナの聖女カテリーナの貧者の姉妹」（Sorelle dei Poveri di Santa Caterina da Siena）の創設者サヴィーナ・ペトリッリとの親交を深め、以後同修道会の理解者として歩んでいく。同修道会は慈善をその主たる活動とし、託児所、孤児院、寄宿学校、病院等を設立し、貧者への食物の配給にとりくんだ。今回の調査で、フランキ自身の作中にも慈善をはじめとする活動的生を称揚する意味内容が数多く見出された。

元来敬虔なカトリック信徒であったフランキは、その初期作品から、活動的生を称揚するテーマを一貫して扱ってきた。現存する最古の作品《ハンガリーの聖女エリサベツ》（プラート、サン・ドメニコ聖堂、1860-61 年）は、夫に隠れて貧者への施しを行い、事が露見しそうになったとき施しのパンが奇跡的に変化した薔薇を携えている。その対作品《聖王ルイ九世》は、この王が起こした二度の十字軍遠征を暗示する剣を携えている。《聖ゲオルギウス》（プラート、1863 年）は当時ガエタノ・グワスティによって聖人がその地域に施した善行の擬人化と解釈された。《聖ステパノの遺骸の運搬》（プラート、大聖堂付属美術館、1864 年）及び《聖ステパノ》（チェーザレ・グワスティからエンリコ・ビンディに寄贈、1867 年）はこの最初の殉教聖人の活動的生を称揚している。プラートのサン・ピエル・フォレッリ聖堂祭壇画（1871 年）は古代ローマ帝政期に殉教した三聖人を描き入れ、《聖女マリア・マッダレーナ・デイ・パッツィの法悦》（フィレンツェ、セミナリオ・マッジョーレ、1866 年）では、室内に苦行用の鞭を描き込むことで、同時代文献により殉教と同義とされた苦行が称揚されている。

装飾画家ジョルジョ・バンディーニと共同制作した、シエナのミゼリコルディア墓地のバンディーニ＝ピッコローミニ礼拝堂装飾（1880 年）及びヴェントゥーリ＝ガッレラーニ礼拝堂装飾では、装飾中の銘文に活動的生と隣人愛を称揚する文言が選ばれ、特に後者では、エンリコ・ビンディが説くように、新約時代の善行が旧約時代の善行に優るという意味内容が読み取れる。こうした新旧約の対比はブローリオのカステッロ・リカーゾリのサン・ヤコポ礼拝堂装飾（フランキの下絵に基づくモザイク画、1878 年）にも、《姦淫の女》（律法の裁きへの非難）と《山上の垂訓》（新約の教えの提示）の対比によって表されている。同礼拝堂入口のモザイク画《聖ヤコブ》（1899 年）は巡礼杖のみならず「手紙（EPISTO/LA）」と記された書物をも携えることで、「ヤコブへの手紙」2, 17 の「信仰は、もし行動を伴わなければ、死んでいます」という教えを暗示する。同じカステッロ・ブローリオ所蔵の小型祭壇画（1901 年）は、聖母を囲む四人の聖人・福者のそれぞれが銘文を伴い、うち三人の銘文に神の恩寵への言及が見られるのに対し、リカーゾリ家の祖先である福者ベネデット・リカーゾリの銘文だけが義人の功績に言及している。さらに前述したシエナのサンタ・テレーサ女子寄宿学校礼拝堂装飾においても、聖女テレーサの観想的生のみならず活動的生を扱った題材（《執筆するテレーサ》、《修道院の建設を

命じるテレーサ》、《十字架の聖ヨハネに修道衣を授けるテレーサ》)や挿話中に活動的生と関連するメッセージを含んだ題材(《甥を蘇生させるテレーサ》、《聖ペドロ・デ・アルカンタラのテレーサへの出現》)が多く選ばれている。

こうした理念は、死者の埋葬など扶助活動に専心する各地のミゼリコルディア会や、孤児の教育等の奉仕活動に特色をもつ「貧者の姉妹」会、「愛徳姉妹会」など、フランキに作品依頼をおこなった多くの修道会・団体に共通する。とくに前者の会則註釈書（*Direttorio*, art.236）には、子女の教育を絵画制作に準えた一節がある。また若い頃のフランキに決定的影響を与えたパトロン、チェーザレ・グアスティの、生活と芸術の一致を説く理念とも重なり合う。さらにフランキ自身がシエナ美術学校で終生教鞭を執り続けた教育者でもあり、シエナのサンタ・テレーザ女子寄宿学校礼拝堂装飾やジェノヴァのキアッペート神学校装飾等の仕事で教育施設から直接作品委嘱を受けている。ここに、芸術を通して隣人愛を訴えるとともに、みずから教育者として隣人愛を実践し、芸術と道徳と宗教の一致をめざす芸術家フランキの姿が浮上する。それは同時に、フランキという実例を通じて、19 世紀イタリアの復古的宗教美術の特色と精神性のあり方を考察することでもある(以上、雑誌論文④)。

さらに、フランキ原画による Santini 図像（カトリーヌ・ラブレ祭壇画、「牧者キリスト」等）を入手したが、これらの検討・公刊については今後の課題とする。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 甲斐教行「アレッサンドロ・フランキ作《聖家族》とその銘文」、『五浦論叢』、茨城大学五浦美術文化研究所紀要、査読有、第 16 号、2009 年、pp.65-74
② Noriyuki Kai, *Alessandro Franchi e la carità del prossimo*, "Artista - Critica dell'Arte in Toscana", フィレンツェ、Le Lettere社刊、査読有、2008, pp.116-131（2009 年 7 月刊行）
③ Noriyuki Kai, *Un tondo di Luigi Mussini*,『五浦論叢』、茨城大学五浦美術文化研究所紀要、査読有、第 15 号、2008 年、pp.(1)-(6)
④ 甲斐教行「シエナのサンタ・テレーサ礼拝堂の図像プログラム」、『五浦論叢』、茨城大学五浦美術文化研究所紀要、査読有、第 15 号、2008 年、pp.21-57
⑤ 甲斐教行「アレッサンドロ・フランキ作《無原罪受胎の教義》の銘文について」、『五浦論叢』、茨城大学五浦美術文化研究所紀要、査読有、第 13 号、2006 年、pp.17-45

〔学会発表〕（計１件）

① 甲斐教行「アレッサンドロ・フランキ作《無原罪受胎の教義》の銘文について」、第２回イタリア美術史再検討研究会、2006 年７月９日、渋谷・ジェンダー研究所

６．研究組織
(1)研究代表者

甲斐　教行（KAI NORIYUKI）
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０３２３１９３